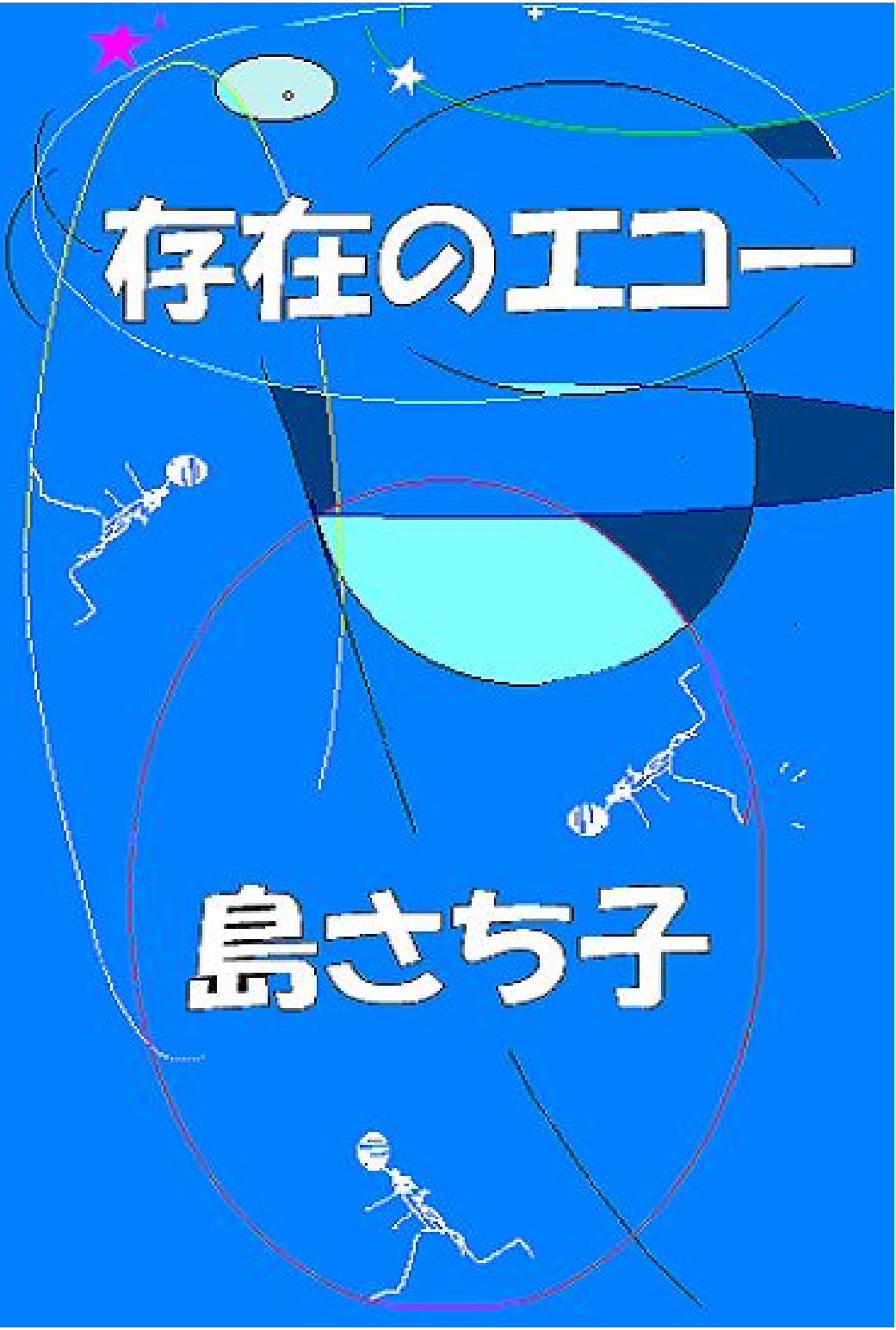
存在のエコー



島さち子

存在のエコー

装画　島　さち子

存在のエコー

ここにも、のぼっていく気流と、おりてくる逆立ちの気流があるが、女をとりかこむ部屋のなかの空間は、別に横切れそうもないほど広くはない。女は自分から隔てて窓を見ている。

窓の右側から左側へ、一方通行に飛んでいく白いボールは、すでに数十球になる。数えることは、生やさしいことではないから、時間と自分のつりあいがたもてるくらいの、適度に間延びした数え方をしている。

数十も、それ以上もの数のボールが投げられたらしい。また一つ、右から左へ飛び、そして又……。

女は一球ずつしか見ていない。飛んでいく同じボールを何回も見たのかもしれない。

暫らく考え、何も考えつかないで、軽はずみに動いてはいけないというように、同じ姿勢を持続し、見ていることの全部であるそのことに欺かれそうになっている。

たくさんの球が右から左へ飛んでいって、地面にぶつかり、はねかえり、転がっているのかもしれないし、そうではなく、窓枠の向こうの見えない誰かと、見えない誰かがキャッチボールをしていて、右の誰かから、左の誰かへのボールは窓を横切るけれども、左の誰かからの返球は窓枠の上または下を通過していて見えないのかもしれない。往復している一つのボールの右から左への流れの一部分、それしか見ていないのかもしれない……。

クイズの解答をたやすく見ることができるのに、のろのろ考えているように、ほんの数歩窓に近づけば、外を見通すことが出来るのに、それをしない。ボールの飛んで行くことと、女はもともと何のかかわりも持っていないし、時間が気まぐれに進んだり後退したりしそうだから、見て、確めて、それっきりになると、数えることのかわりに、いくらか身動きするほかなく、休息が足踏みになり、足踏みが歩き、行ってしまう。

ボールは一つであるか、多数であるか、猿でさえ区別できそうな、一つと多数の違いなのに、どちらなのか判断できないでいる。

女はこちらを向いている置時計のなかに、鈍いけれども、好奇心の現れた自分の顔を見届け、くずれかかったスツールを引き寄せて軽く腰をおろし、さっきそっくり、そのまま、ボールの飛ぶのを見ている。固有の白を打ち消し、あるいは固有の白に凝固して、一方通行にボールが通過する、それ以外につけ加える何ごともない。

……　一つであることと、数十個であることは、全くよく似ていて、ほんとは区別すべきことではないのかもしれない……。いつもの彼女なら、一つがたくさんと同じだと言われたら、アルコール漬の標本の胞状鬼胎を見せられた時のような、本能的恐怖を覚えてしまうのに、そう思うことでほっとし、そこにいることから抜け出している。

忘れっぽいことで待った時間を消化し続けているのに、男は来ない。

男はずっと離れたどこかにいる。男に命中した白球が、体のなかで、しぼんでゆがみ、0型になり、0が00となり、000となり、あるいは0000となり、卵を生み過ぎるニワトリのように、次々0を生みつづけ、次第にケタ数をまして0を並べ、遂に自らも裏返しになって産道から脱け出て、0となって生み落ちると、もはや－0に変っている。

男はどこかをうろつくのに都合がよくなっている。誰からも無関心にされながら、気づかれないで

誰にも親しく近づいて行くことが可能になって彷徨っているのかもしれない。

わたしは、彼女を見てしまわないうちに大急ぎで目をそらしたのだが、一瞬、もう誰なのか見分けがつかなくなってしまうほどに、お互いの顔と顔、目と目が近づいて静止している。

彼女の顔のなかに、何か欠けた部分があって、わたしがその欠けらを拾い、そしらぬ顔で自分の顔にくっつけているのを、とがめでもするように、四、五センチまで近づいている。さらに近づいたら、わたしの自覚しない継ぎ目がほころび、鼻の一部が欠け落ちそうだ。わたしの匂いを彼女が吸い込んだり、彼女の匂いをわたしに吸い込ませたりしていることに気づかずに、お互いに触れない極限において、近づいていることに礼儀をわきまえ、近づき過ぎて見えない見方をしている。

「あなたは、あのかたそっくり！」

彼女は見えない見方をしていながら、それを見える見方の頂点に化してしまい、奇妙な落ち着きをもって言う。

わたしはいま、そわそわしはじめ、彼を待つことが適さなくなる、すれすれのところにいたから、ここから自由に立ち去ることが出来そうなのに、そんな弱さを避けて向かい合っている。

「そっくりだと言うのは、顔やなんか似ていること、怒らないで下さいね。何故とも知れず、そっくり似ていらっしゃるから、そう申しあげているんです。似てるってことは、少し薄気味悪い現象かもしれませんけど……」

この言葉をいきなり突っぱねる材料はなにも示されていないにしても、わたしはわたしであることを護り続けなければならないから、こんな言い方をしたくないのに……。

「似てるって、誰に？」

彼女は答えることを、急いでわたしに届かせまいと故意に操作をするかのように、はいている靴のかかとに重心をかけ、つま先を持ちあげる。

「あなたにそっくりのかたなの。許せる？　とんちゃくしない？　ほんとよ。薄気味悪い？　似てるってことは、どちらかが真似をしていることですもの、薄汚いとお思いになるでしょうね。あなたたち、精神的に薄汚いみたい！」

まるで身に覚えのない模倣という罪をきせられそうになっても。わたしは自分の特徴の小さな部分部分をとらえてくれる筈の鏡を覗いて見ようとしないし、どんな反論、どんな皮肉も思い浮かべよう

としない。知らずに彼女に似せて、靴の爪先を踵の高さまで持上げて、傾斜している靴底を水平にし、ぐらぐらすると、さっきまで二人の顔が同じ高さだったのに、わたしは彼女より少なくとも八センチは背が高くなっている。

「そっくりだなんて、お気の毒みたいですわ。しかし、昔は親に似た子供が生れ、兄や姉に似た弟や妹が生れるという具合でしたけど、近頃では、人間の遺伝子が相対的に減ったというのでしょうか？家族は似ていなくなり、むしろ、赤の他人に似ていることが多くなったらしいのよ」

――大抵の人間はたかだか自分に似た子供しか生めないでいるはずなのに――'。

「そんな事実知らないわ」

「知らないですって！　そうなったのよ。人間の行動半径が広くなったことが、影響しているのでしょうね。家族よりも、赤の他人に似ていることが普通になったのですから、どんな人に似ていると言われても、そうお気を悪くなさるほどのこともないわ。ただ、あまりそっくりだから、ちょっと嫌らしいほどそっくりだから……薄気味悪くなってなってしまって……」

わたしは悪質な戯れの餌食になるのを避けて逃げることを企てる。すぐさま逃げると言うより、かすかな動作のうちに、隙をみて逃げることに移ろうとしたから、おかしなしかめっ面になって、かえってわたしに貼りついている誰かそっくりの顔からの逃亡を試みて、彼女の方に助けを求めていきそ

うに見られてしまう。

「怯えることはないわ。まずそっくりだということを見届けてごらんなさい。その後で、文句を言うなり何なりして下さいね」

彼女の言葉に、回りにいる人々は、ことさら目を背けた気配もないのに、一様に背を向けており、どんな小さい類似も嗅ぎつかれまいとしているようだ。彼女にしたところで、痩せているのに、丸い肩をあらわにし、胸を狭めてへこませたまま、ほんの見せかけにすぎない動きのない表情で、これも見せかけに過ぎない節のない指で、横断歩道の手前にたたずんでいる白いワンピースの女性の後姿を指さしている。

すこし腰を落し、足を少し不揃いにして、指さされても指さし返す能力を持たない無防備な後姿。少し不自然なシワもスカートに見えている。消え入りたいのに消えないでいる何万人かと同じ後姿である。

「後ろから見る限り、どこにもいる人みたい」

「どこにもいる？　そうね、あなたの後姿ですもの、いつ、どこでも、あなたから離れないで一緒にいることになるわ」

彼女はその後姿を持主にことわりなしに無理やりわたしに押しつける。その人にさえ恐らく見捨て

られているありふれた後姿が、寄生虫のようにヌクヌクと、わたしの背にへばりついているなど、今まで、わたしの全身のどの細胞にあたってみても、少しも心当たりのなかったことである。

「どこにもいる普通の女性達に似ていると言ったのに……」

「あなたはご自分の特徴になれきってしまって普通だと感じていらっしゃる。普通の女性達、と言って複数形に感じてもいらっしゃるわ。あなたは、何人ものあなたを既に知っていらっしたようね」

上半身を突き出して、ありありとその感情を誇示する彼女の隙をねらって、わたしは幾人分にもされてしまったわたし自身を捕まえて投げ返したくなってしまう。

建物や車がもうろうとあるなかで、やわらかな薄色の体の人々が、一斉に流行性の風邪でもひいたように、熱っぽい体温をはなち、わずかに汗ばみ、手も脚も萎えさせる。

しかしよく見れば、それぞれが、どの人より背幅が何センチ狭いか、広いか、どんな人より髪が何センチ短いか、長いか、肩の下がり具合や丸み、足の太さや、形において、全く違っていて、それぞれありったけの注意力を背中に集中し、それを自慢の種にしているらしく見えなくもない。

その女性の後姿にしたところで、例外ではなく、軽く握っていた手の小指を大きくしなわせ、部分的に体をたて直し、かすかに傾き、軽そうな髪を横に振って全部片側に寄せ、わたしに過去一度も見たことがないのではないかと言う思いを開かせる。

今までこの目で直接とらえたことがなかったと言う共通点だけを持って、わたしと彼女の類似を信じる手がかりとはできない。

わたしに似ているのかもしれない女性の後姿がいく。

彼女がほんの軽くうつむくと、路面に白いハクボクの矢印がこぼれている。後からつけていくわたしのためにしるしている矢印に見えるが、つぎに描くまでのあいだ、ちょっと指先をひるがえし、首を真直ぐにする彼女は、自身と矢印との関係にだけ強く惹かれている様子も仄見える。

彼はすでに裏切っていて、わたしの行動をはばめないから、彼女に導かれて行く。

ときどき、ほんの軽く腰をかがめてすばやく描く矢印は、狂いのある機械のユーモアのように、ときに長かったり、小鳥の足跡のように短かったり、間隔を置きすぎることもあるが、非意図的に描かれるはずがなく、必ず到達点に達するはずの矢印に違いないから、わたしは踏みつけることを避ける、その後姿と合体して一つになってしまう危険性をなんとなく感じる。行く先にどんな策略が待ち受けているかもしれない矢印を、ときどき歩幅の中に入れて、ややくねくねと歩くことはしてみる。

彼女のワンピースの両脇から何本かでているV字型のたるみを揺すり、ハクボクを持った手をぶらぶらさせ、わたしから二十歩ほど離れ、二人の間に数人の買い物袋を持った中年の女性を挟んでいる。女達は呪われた一瞬、彼女のなかにわたしが融合される危険を何本もの太い足でふせいでいるのかも

しれない。示し合わせたように大きく肉づいた尻をスカートのなかから、それぞれはみ出さんばかりにして、白いハクボクの矢印を踏みつけて気にもとめない。描いている者一人だけの道路であるらしいその印は、わたしが踏みつけた場合、墜ち込んでしまいそうな危険性をはらんでいるのに、彼女達は細い溝におちこんだりしない重戦車のように踏み躙りながら、沈殿物を吹き上げる調子で、ひとりひとり勝手な方向に気侭に話を進行させているらしい。

幾つもの音のつくるただの饒舌のなかで、つけ加え拡大しはじめていく幾つかの想像もないではないのに、この次の曲がり角がきて、どちらへ曲がるか？　わたしには首にクサリをつけた犬ほどにも行く先を推定できないでいる。

似ていると教えてくれた女性の、極端に接近した見えない見方を、見える見方の頂点に化した点において、二人がそっくりであるにしても、わたしにとって、それは疑わしい仮定でしかないそっくりだと言う点線は、ハクボクの白い矢印になって連なって伸びて、今のところ二人を互いにある距離を保たせ、接近させない作用をしている。

ともするとわたしと彼女の類似は、いま、不確かな状態にいるので、こうしているうちに変形しあいながら、全くそっくり、全く似ていない、はっきり判別できる一目瞭然の状態をつくりあげるための手続をしているのかもしれない。だから急いで確めるのを避けて、彼女に到達しようとしない。

彼女のぶらぶらさせている手、おそらく白い粉にまみれている手のなかのハクボク、次第に短くなっていく長さに比例して、見届けなければならない最後のとき、前進をやめ、わたしを振りかえり、彼女の顔をみせるときが近づいているのだとひとりぎめをしてみる。

矢印の点線が、わたしの体の中心を貫いている時に、ハクボクがなくなった場合、わたしは点線通りに切断され、二人に分裂し、増殖すると言う呪縛を今度は自分に課して、わたしから離れたところに、わたしと同じ重要性をもった一人を置こうとする。

矢印を避けて遠のくと、それは二人を互いに結ぶ点線ではなくなり、彼女自身の道路らしく、わたしから離れる。

「わたしは一体何処へ行くのかな……」

薄気味悪いことに、長い間禁じているのに、結びついて離れない独り言の習慣に警戒をおこったって、鼻唄みたいに繰り返し口の外にもらしたか、中年女たちに聞きとがめられる。それぞれが、何分の一テンポずつか不揃いの歩きかたの彼女たちなのに、わたしがここを歩いていることの奇妙さをみつけ出すと、急に顔を明るくし自分達が何処にいくのか忘れかねないほどに、わたしの行先にとらわれて接近して歩き、わたしは女たちに囲まれて、自然、さっきさっと描かれた矢印の一つを踏んでしまう。前から後になり、間を掻き分け、前をさえぎり、振り向いて、まじまじと見、両側からも、顔

と顔を挟んでくる。
「あなたがいま、ここを歩いているってことは、ひょっとして、同じところに行くのだということもありうるわね。同じ列車に乗っている人みたいに」
「そうよ、列車のなかで、ガタンと揺れたとき、目をさまして、そんなことを言うものよ。何処へ行くのだったっけ？　なんて」
わたしは体を縮めて、変にとぎれとぎれの笑いで答え、矢印をぴょんと飛び越える。今を意識することに怠慢で、外側の誰かにしかつなぎとめられない愚かしさを、まぎれもなくさらけ出したわたしに対し、女達はさっき以上に自信を増し、交互に左右を見、冷笑もみせずに無関心に移り、ハクボクをもっている彼女の後を横一列になってだるそうに歩いていく。
急に前方に対する魅力が薄れ、後から背を叩かれたように振りかえってしまう。
彼がこんな時来てくれれば……。まるで引き返すことの出来ない道を辿ってきたように、彼に助けを求めている。
しかし、すぐそう思ったことを嫌悪する。歩き終わったあとの寒々としたアスファルトの上から白い矢印はこちらに向かい、とがり、非難し、わたしを貫通しようとしている。
彼が来たら、わたしは、わたしそっくりの女性と背と背を重ねあわせ、さとられないうちに、すっ

ぽり隠してしまう位置に立ち、しっかり姿勢を保たなければならないのに、もし貫かれたら、赤い点を、どう押えるのだろう。

彼女と矢印の向うから来ることを欲している彼をむすぶ仮定の点線の中間という欺瞞的位置に、わたしは追い詰められ逃れられず、遂にこの地点で彼ら二人に表裏から裏切られてしまうに違いない。

しかし、彼は見えないし、来る気配も感じられない。

或る日、音のしない歩き方をして男が来る。体重を今、ひかえ目に床にかけておくことによって、そのぶん、立ち止まった場所で多少どっしりとした生命の重みを、女に見せつけようと用心をしているかのように……。男は本来なにが欠けているために自分が軽々しいのか知っていないから、見せかけの重みをつけ加える方法を誤って、女に密着しすぎ、贋の心臓の鼓動に耳を傾けているような、信じにくさを感じさせてしまう。

それでも、女が男に見覚えがあり、男が女に見覚えがあるという、おぼろげなクサリによって、相

手の所有物であるかのような、ゆだねかたで接近させている。女がどんな人間であるか、男がどんな人間であるのか、どちらからも質問らしい質問をすることなく、打ち明けたいことだけ打ちあけ合うが、相手の聞きたいことは何ひとつ言ってはいない。そんな親しさで、お互いが外見だけでなく、内部の僅かの部分を譲り合った優しさにいる。

男のもっている汚れた紙には、多くの名前と数字、580 とか、900 とか、730 とかコピーされている。たぶん、なにかの点数か金額に違いない。彼の名の欄には 000 と記入されている。

「000 は 0 とどう違うのかな」

「普通 0 と書いてある場合だって、炙り出せば出現する筈の 0 の行列なんでしょ」

女は当たり前に答える。

「何故あぶりだして見せるのだろう？　0 より無であることにおいて、ケタ違いだと、おせっかいにも知らせているのかな？」

女は男の関心事に拘束されることもないから、聞こえることを素通りさせて、せまくなっている視野の男の顔を瞼で押し潰してしまう。

「さしせまってどうということもないが、ふにおちないんでね。きみにはどんな数字があるのだろう。多いからって自慢にできないと思うよ」

男は女の頭の表面を覆っている無数の細い髪の、十本を一本と数えたり、五本を五十本と数えたり、全部を逃さず数えようと、引っ張り、分け入り、その森のなかに、三分の一消え、二分の一消え、四分の三消えて、女の秘密の核心にしのびこめるとでも考えてか、消え失せてしまう。

引き抜かれたり、折り曲げられたりするのを拒んで、女の髪の一本一本が不思議な密度に根をはびこらせ、ますます数えられつづけながら、数えることを偽り続けると、出来るだけ場所をとらないでいた現実に生きている意識が千にも万にも殖えてしまう。

「わたしはソラという名前一つだけじゃ間に合わないわ。何億兆って名前が世界にあるんなら、百も千もの名前をわたしの自由にして構わない筈よ。あなたは、わたしをいろんな名前で呼ぶの」

ここにいる状態のまま、男は痩せ細って何にも答えず、すでに何者にも取り囲まれず、何者をも取り囲めなくなってしまっている。ほどよい風さえ彼を何の抵抗もなく通り過ぎて、彼の外側から、からみついたり、彼の体のなかで、からみあったりはしない。

「あなたは返事ができなくなったのね。わたしが名前を千にもするのと一緒に、あなたは、あなたの名前を消し去ったのね。わたしがあなたを呼んでも、何回呼んでも、決して返事をしないのね。出来ない筈よ。名前をなくしたあなたは、決して呼びかけられはしないのだから」

女は男が呼びかけてくるのを待っている。呼びかけは、どんな名前であっても女をさしている筈で

ある。今後、女は千もの名において二枚舌ならぬ千枚舌をつかって、一千種類もの、さまざまな相反することを言いつづけ、言ったことの数の多さを自慢しなければならない。

女は、思い通りに千匹ものアマンジャクを飼いならすむつかしい仕事をやりとげられるだろうか。千もの名前をつけたら、彼女を呼ばないひとからも、呼ばれつづけるだろう。違う。他人を呼んでも自分を呼びつづけ、返事と呼びかけを一度にするという孤独に陥ちこむことになるだろう。

男に話かける。おかしなことに、話し掛ける言葉が千もの意味に揺れ、女は男を侵すことも救うことも、すでに不可能になっている。

「わたしは首から上をなくしたことがあったわ。足のない人が、ない足を重く感じたり、走りもしないのに走り疲れたり、痒くってしょうがなくなったりするみたいに、結構、なくなった頭のなかでいい考えが浮かんだり、ガンガン痛んだり、軽蔑したり、行動を命令したりするの。体の一部分をなくしたと同じように、名前をなくしたら、呼ばれるはずのない名前を呼ばれているような幻覚に悩まされて、答えなくてもよい返事をしなければならない羽目に、陥いるのでしょうね」

男は女の話し声など、聞いていることの何千分の一にしか感じないほど、呼ばれるはずのない名前を呼ばれ続け、それを遮る方法がなくなって、耳の内壁に爪のあとがつくほど指を押し込んでいるのかもしれない。

「音には聞こえる範囲があるのだということを忘れては駄目よ。ここでなら、名前があっても、あなたはわたしにしか呼ばれる筈がないのに」
女は男と交わす会話を失っている。千もの名前をまだ一つも名づけないまま、呼ばれないまま、高く積み重ね、一番上の名札にソラをおく。
「取戻せるのよ。なくした名前をはっきり取戻せるの」
女の話を聞いているものは、彼女以外に誰ひとりいないが、一番上の名札ではなく、まだ名づけない名札に名づけられて、女は幾つかの耳で聞いていることに気づく。

千よりも、もっと多くのわたしで構成されている星クズの不定形の尾をひいている箒星、このわたしは、その尾の微細なかけらに過ぎない。頭の部分の、一つの光の強い星、わたしの星クズのなかで実体を有しているのは、それだけなのかもしれない。そのわたしの核みたいなもの、それはいま、後姿だけをみせて、路面に、進行する矢印をこぼしながら行く誰か。その尾にすぎないわたしは続いて

行かざるを得ない。
合わせ鏡で後ろをみるに似た羞恥心が、少しずつ、わたしを捉え始め、絶えずある間隔を持っていたその後姿に近づき、或いは引離される。服の幅が広すぎる為でもなさそうなのに、彼女のスカートの部分にV字型のたるみが次第に大きくなる。自分のもののような何段かのたるみ、ためらったり、走ったり、ためらったりする。すれ違う車体のそれぞれに太陽が三コ輝いている。
車の音が近づくにつれ高くなり、遠ざかるにつれて低くなる現象に、つぎつぎ襲われ続け、わたしは耳の位置をかえるために背伸びするが、音は体をはみ出しているのだから、そこにもある。
彼女の後姿がすーっと消えたら……。すーっと消える波形の切れ目、街全体が傾くと、わたしは足を跳ね上げて空を踏み、空を海とみる。
水平線は何本も引かれているし、立て直そうと思わないうちに直立してしまった街並みがふるえるから、自分はいったい何処にいるのか、悲しいことにわかっている。
はじめてみる思いで、わたしはそこにある街並みを眺め直す。歳月の向こうから再び湧き出たような古びた家並みがある。
粗暴に伸びた庭木の枝のはみ出ている路地への曲がり角に、光で半分消されているが、今まで後ろしか見せなかった彼女の横顔が見えている。わたしは見えているものを洗い出すように目を空気にさ

らしてみる。
ハクボクで△を描き、▽を描き、○を描き、中心に四枚の花びらをかき、さらに六角形でかこみ、ギザギザを描き、一つのマークらしき物を描いていく。腕全体を動かして長大な矢印を路地に曲げる。それが最後の矢印であるかのように。
空気をくぐって見えている横顔は、暗いまばゆさのような輪郭につつまれているが、片目と突き出た鼻と唇が、こせこせと積重なって見えるだけだ。
わたしは足を止めないで、矢印が描かれるのを囲んで立った中年女たちの後をかすめて、路地を曲がらないで進んでいる。横を見ないで、たくみに彼女たちから視線をはずし、まっすぐに突破し、よくわからないうちに進んでいる仮定の点線から脱け出してしまう。
軌道を外した場合、皆そうなるように、殆ど転ばんばかりに止まり、実に短い一瞬だけ、つまり珍しい位置……。膝と膝の間から遠望する形で、見た一瞬だけ、ハクボクのマークの矢印にほとんど接するところに、まるで水溜りに映った自分の顔のような具合に、その女性を正面からちらりと見る。
その顔は初対面であるし、実に短い特殊な瞬間であったから、当然のように次の短い一瞬忘れ去って、自分との類似をキャッチし、検討すべき時があったとは信じにくくなっている。
わたしは鈍感になってしまったなと思う。もう、前方に観察し、つけ狙うべき目標は一つもありは

しない。目標がなくなっていることは、見えてくるものに対する反射である、敏感さを失っていることなのかもしれない。

前方は空白であると同時に、視線のないすさまじく本質的なもので固まっており、命がないようでもある。だから成り行きまかせ、行き当たりばったりの、わたしの行動を跳ね返す。

わたしは路地を見通す場所に立っている。得体のしれないマークと長大に曲がった矢印の上にいて、路地を入った十五メートル先に彼女たちをみる。何分か、何秒か、はっきりしない時間たたずみ、何回かはっきりしない回数、路地の曲がり角を曲がらずに行ったり来たりする。小さいが、不自然で仰々しい自分の足音を耳にする。殆ど機械的になってしまった、行ったり来たり、立ち止まったりする動き。曲がり角より向こうには、まだ矢印は描かれていない。彼女たちはひとかたまりになって、頭を寄せ合い、同じところに止まっており、誰一人、左右や後ろを見ることをしない。

わたしはこうも変化のない状態にじりじりして、こちらに注意を引きつけるなんの口実も持たないのに呼んでみる。呼ぶ名は一種類しかなく、ソラを呼んでしまう。こころみでもなければ無分別でもなく、ごく自然なことであるらしい。

ソラと呼ぶと、まるでその女性とわたしがそれだけの貧しい関係でしかなかったように、一秒たらず横目でわたしを見る程度まで顔をみせる。彼女のカールした髪の先が目尻に入っているようだ。

わたしは大急ぎで、さっき見た、かすれた横顔を横顔のままとらえて、わたしはよく自分をだますときのやりかたで、その顔のモデルをさがす。Aに似通ってしまう。少し減食によって痩せさせ、ふけさせ、鼻の先に豆粒ほどの肉の丸みをつけ加える。似たものにするため、さまざまな操作でつけ加え取り去り、その横顔をAにし、Aをその横顔にしてしまうことに到達すると、もうわたしは、自分をだますやりかたをすっかりはぶいて、自分をだますことが出来てしまう。

……Aにそっくりじゃない、Aの妹のA’にも姉妹みたいに似ている！

わたしは、わたし自身を追い詰めるかのようなこの地点に来ていながら、依然として自分の顔を愛しつづけているように、または嫌悪しつづけているように、どこかにしまいこんで、くらべることを拒んでいるらしい。

拒ばんでいることによって、心よくしているが何時もと同じに、ややぬけていて、何のために一生懸命、自分の顔をしまい込んでいるのかわからなくなっている。カラなのを知らずに鳥カゴから鳥が飛び去らないように番をしているのに似て、いなくなっていて、取り出そうとしてさえ、取り出せないわたしの顔をどこかにしまいこんでいる緊張にいるのだ。

はりつめていて、Aそっくりじゃない！　快活に笑って、Aに対する奇妙な誇りの感情を吹き出してしまうと、わたしの周囲も体のなかも、すっかりカラになって悲しみが呼び集められている。

わたしは道路の表皮の、ほんの上わっつらにいて、その厚みのなかに一ミリも侵入できないでいる。自分に一番近いところにいながら、自分の厚みの見えないわたしが立体感を欠いていると同様に、わたしの見たあの横顔も、裏の白い紙切れの薄い一枚のまま、ひらひらしている。

紙きれに過ぎない横顔を蘇生させる試みをはじめる。その横顔の裏と裏にノリをつけ、貼りあわせ、左右合わさった顔に適度のふくらみを与え、息吹きを与えなければならない。

体の薄いチョウチョウ魚科の熱帯魚が、水のなかで思う存分うるおいながら、泳ぐ。

……正面から見なければならない。真正面から見る顔が、ほんとの顔なのだから……。

熱帯魚はわたしに近づき、わたしから遠ざかり、左側面をみせ、右側面をみせ、左横顔と右横顔を交替にみせている。真正面から見る顔をとらえようと懸命になるが、線でしかなく、とらえようがない。線にすぎない正面から見る顔に両目と口があることを確めようとする。努力はむなしく、顔は次第に細くなり見えなくなり、わたしの睫毛と一致する。

その女性のなかにわたしの顔を見つめようとする限り、なに一つ見えなくなり、そのうちになにも感じなくなってしまうのかな、と思いながら、わたし一人が、わたしだけでなく、似ている顔さえ見つめることが出来ないという、孤立状態から遁れようとする。

河原には無数の石がある。女は自分の何倍も重い石の上にいる。

どの石も、ちらちらと光をだましながら、ずっと前からその位置を保ったままだ。女が石の上を飛び歩くと、足裏は一歩ごとに温度となめらかさが加わり、しみてくる痛みもある。

突き出した風が、石のくぼみの曲線を引きのばし一つのコブを越えて、割れた石のギザギザの側面にぶつかり、空気の渦を消さずに動いていく。逃げてしまうためにもがいて全部の石は光とごちゃまぜになるが、もう一度、静かに女の視野に詰め込まれる。

石はただの石として、にぶい反応しか女に与えない。それは腐敗しそうもないし、機械にくだかれそうな予感もない。

女は死人の頭をみるような目で石を引離し、今までの集中点のない見方から確実に一点に閉ざす見方に変ってしまう。しかし、見ることは全身的な肉体の働きになっているから、女の体と一緒に、その石も動くことは避けられなくなっている。

「じっと動かないで、見てて！」

「石がみんな軽そうに見えるでしょう。みんな水に浮いているんだわ、石のずっと下を掘ってみると川なのよ。石が柔らかい？　見て！　ぶつかっても死なない？　どうかな、わたしとおなじ堅さだと思うわ」

女はここに来る前には全く関心のなかった石に、注目に値する価値を見つけ、回りの石にも、砂に近い細かい石にも、同じ価値を見つけ、回りの総てを平均して見つめ、何もかも、全部の境界をあいまいに消してしまっている。女自身もそれらと境さえ持たない似たものであり、周囲に対して消極的でも積極的でもない動作しか示さない。

無数の石は、女自身の頭部、或いは色んな人物の胴、さらにその部品であるバラバラの目耳口である。

……そこでそうしている必要はないわ、耳を踏んでいく足があっていいし、目玉を掴んでばら撒いていく手があり、転がって足を攫っていく胴があっても構わない。

女が男に話している。

「取り外されてばら撒かれている夥しい人間の部品を前にして、わたしのものを探しださなければならなかったの。目は魚群のように白い腹をみせ、耳は貝塚に捨てられた貝のように……、数限りなくあるから、似たようなものばかりで迷ってしまうと思っていたのに、どの部品も、ものすごく違って

いて、違いすぎることが、これがそうだという断定を妨げているみたいなの。一つの体のなかにつながれていて、なんとなくなじみあっているけど、一度なにかの拍子に投げ出されてしまえば、もっとぴったりと融け合った組み合わせで、磁力で引きあって結合したみたいに、つながってしまい、きっともと通りの不確かなかかわり合いで結合した体に、もどるなんてあり得ないのだろうとは思っていたから……。今までの組み合わせの、かくれた矛盾のために、もう一度わたしの体を造り出すことが出来ないと言うのならばわかるけど……。だったら鼻、あるいはそれに近いもの、一つでいい、独立したものとして探すことが出来てよさそうなのに、不可能なの。選り好みしている結果そうなるんだって、おっしゃりたいでしょうけど、女は自然のたすけがあるみたいに正確に見つけ出す力をもっているというわ。一番近いところに知っていて、保護し、変身をくいとめていたはずの自分ですもの、見えないなら掴みだすことが出来るはずだと思ったわ。わたしは自分の骨の方から絶えず判読しにくい顔を、自分に示しながら、真剣に未知の部分を否定しながら、目玉一つでもいいから見つけ出そうとしたのに、狂気のように探しても、一個も見つけられず、どうしようもなかったの。自分を確かに受け持っているかどうか、粗雑に生きているものなのね」

「対立しているわけでもない体の部品をぶっつけあうからそうなるのさ。忘れっちまったんなら、何時か見覚えのあるものになって現れるまで、のっぺらぼうの顔ですまして待てばよろしい。それがで

きないなら、体の部分にわかれたままでいいだろう。もとどおりに顔をつくり出すなんてことは、ともすると、何かに恨みをもって仕返しをするのに似ているのかもしれない」

河原にたむろしている女たちのなかば消えかかった輪のかたすみで、男はまるで自分を誉めそやしているような顔で話している。

「部品だけじゃ人間ではないわ、鼻の下に短い一本のひげみたいな体がみじめな姿をさらしているにしても、それとわかる人間らしいまとまりがなければ……」

男は立ち去ろうとしている。こっそり滑るように進んでいくことができ、体中を一緒に引き連れていくことに苦労もしていない。いつも一人いなくなれば、女たちはいなくなる男を笑って、笑いを押し殺したりはしない。

わたしの目がとどかないか、向こうがこの目までとどこうとしないか、どちらかのへだたりにいる。彼女たちのいる路地に踏み込み、矢印を欠いている間隔を破壊することを試みる。せかせかと歩いて、

黙り込んで、あたりさわりのない態度で目を細めてみる。わたしの目の前で、引き伸ばされた写真のように、彼女たちの顔が立ちふさがっている。

ひるまずにぐいっと目を突き出して、縁もゆかりもない、いつ見ても見逃している種類の顔ばかりのなかから、そうであって欲しいとAの顔をさがし、軽くひとの言を信じる好奇心を持ってこっそりとわたしの顔をさがし、ぼんやりとした敵意をもってその女性の顔をさがしている。

わたしは見ているものを見るというよりも、考えて、考えていることに迷って、まるであてずっぽうのように彼女をみつける。暑さのなかで、突然寒さをかみしめたみたいに、細くあいた口もと。笑おうとしても笑うのに重過ぎるまぶたのふくれた目。蓋を閉め忘れてぽっかりとあいた鼻の穴。醜いのかもしれない。醜いのに違いない。非常に醜いのだ。もう一つの目の中に写った、女の目のなかの女の目のなかの女の目。限界がかすんで、連続を疑似死までにとどめる。特殊なひねまがりの目鼻口は顔から外へ飛び出そうとしている異物。不消化物。積極的に衝撃をよせ集める。そっくりという、うすきみ悪いできごとは、凄絶に醜いという刺激によって癒されなければならない。

鏡のなかで少しは見届けたことがあるらしいが気づこうとしなかった醜さを、わたしはべったり貼りつける。

或る日、少年がけげんそうな面持ちで、女に近づいている。たぶん女は醜さのために弱々しくなっており、すっかり穏やかになって、偽りもたくらみもない健康さにいる。
少年らしくちょっと音を押し出せないでいて、しかし、なんの遠慮もない言い方をする。
「あなたが彼に逢わなかったってことは、逃げたつもりなんでしょう」
「追い駆けていったわ」
「彼が？」
「違う、わたしが」
「とにかく逢わなかったってことは……」
言い終わった声のあとから別の声が姿を現わしているかのように、しばらく口を動かしている。
「そうなったってことは」
女は自分でない他人のように、口ではない耳のあたりから話す。
少年のポケットから出した白いテープのきれはしの上を、女の名のソラが逃げ、男が追い駆ける。

少年はメービウスの帯よりもモット何回も何回も数えずにひねって、テープのはしとはしを接着して輪をつくり、ソラが男を追い、男がソラを追い、ソラが男から逃げ、男がソラから逃げ、ある瞬間は、ふたりがテープの同じ場所の裏と表を同時に走ったりする。全く屈辱的で子供の遊びに類することなのに、女も少年と一緒になって、それを覗き込み、綿密な作戦をたてているつもりで頭を寄せている。

「あちこち……交互に試みるのよ」

少年は体の向きを反対にして、最後の最後まで終わらせてしまおうと、テープの幅の中央線を切っていき、ふたりを別の輪に分離することを企てる。テープはポカッと白く、なに色をも反射するから、すこしの間、女は一枚の紙の向こうのように、隔てられる。

「まだ終わっていない、近じか万事休すでしょう」

少年は最後には黒くなった四角い爪を切って見せるが、ハサミで切り終わった輪は二つにならずに、もっとねじれた大きな輪になって拡がってしまう。

一つの体で異なった状態を分裂して現わしたように、女は首を横にし、手は指先まで真直ぐにのばしている。少年は輪をシワでつくった紙のかたまりにしてしまい、やや楽しそうに、別の身振りに置きかえていう。

「あなたが身替わりにならないですめばいいんだ……。誰かが死ぬかわりに死んじまうとか、誰かの

かわりに誰かになってしまうとか、そんな具合に、こんがらがると困るんだ」
「なんのこと？」
ほの暗くなっていく二階の片隅、宙ぶらりんになっている女の足がみえる。恐らくスカートの中の方までのぞける透明なガラス板の下の、ずっと下の、ほこりっぽい白いコンクリートに、……第一番目の雨粒がおちて、ポチンと、コンペイ糖型の黒いシミをつくり、次の粒や、同時におちた、次の次の雨粒が、まだら模様を描いてとり囲み、まだぬれないで残っているホコリの霜降り模様が急速に消え、光った路面は、もはや円筒形になって跳ね上がるすさまじい豪雨のしぶきだ。
「もう一度言いたくないけど……」
「なんのこと？」
「彼が前に付き合っていた僕の姉の身替りということです」
女はそのことを想像したことがあって知っているのか、ちっとも驚かない。問い返しは果てしがないし、答えはどこにも、問うほうにも、用意されているのかもしれない。
「重病人の身替わりに？　とかく近親者はそんなふうに思いたがるそうね。死体でさえ、育てたくなるそうだから……」
「と言っても、僕の姉とあなたが似ていて、身替わりになれるくらいなら、そのまえに人類はみんな

一卵性多生児だと言ってもよい、……そんなことを言いました」
「家族同士のけちくさい愛情から言ってるつもりね。そっくりかもしれないのに……」
一つの体験として、そっくりだと迷信的に信じてみたくなりながら、女はひとごととして言い、不完全なかたちで、間違って発したような声しか出していない。
外ははねあがったシブキが円筒形に立ちあがったまま、消えるひまのない雨あしで、突発したことのように、あるいは昼の展開に予定されていた、そのままであるような。
「お姉さま、みにくいんでしょう？」
「重症なんだからな……、私が眠ってる時、私の顔になっているのかしら……なんて心配していたくらいだ」
「顔がないみたいになっているのでしょう？　横顔だけで真正面からみる顔がなくなったりして……」
「そうだなあ、ベッドにいて、いつも右の横向きになっているから、いずれそうなるかも！」

路面にハクボクの矢印がもしも描かれていたにしても、雨にうたれ続ける雨水の流れに、流れ去ってしまいそうなガラス戸の向こうに、少年と女は、恐らく全然違った顔幅のない薄い熱帯魚を見ている。

ほんの数メートルのところ、舗装の亀裂のつくった中州に、ぬれて絶えず違った色が流れ続ける。

「なんにも見えないわ」

見るものの位置によってさまざまな反射が、定まらない速度で動くから、路面からなんのしるしも見つけられない。

彼女は鞭毛の一本あるカンテン状の紡錘形のむこうになっている。目をパチパチすると、鞭毛がヨレヨレ折れ曲がったり、まっすぐ伸びたり、くるくるまかれたり、カンテン状の紡錘形は、居所を変えもしないで、毛の形だけをかえる。いま目のなかに飛び込んだゴミにしては、異物感はなく、しつように居座っていすぎる。目のなかに毛が生えたのだろうか。紡錘形のカンテン状のものは、毛根の拡大図に似ている。

彼女たちの間を突っ切って、急ぎ足で真直ぐ歩いて行くわたしが、彼女から完全に断ち切られて、進む方向に自分の力で進んで行くとは信じられなくなる。振り向かないで、後ろから来る彼女たちを

感じる。身体に節を持っている毛虫のような形で、彼女たちはわたしに連なっているのかもしれない。殆ど独立した脳神経群をもった体節が連なって、わたしに前進する意思はないのに、次の体節も、次の体節も動いてくるから押されて、一匹としては前進していく。

殆ど独立した脳神経節のうちの、わずかに独立していない神経の連なりによって、わたしは後ろの体節の様子を知っているらしい。

毛虫である証拠に目のなかのカンテン状の毛根から伸びた毛が、植毛のようにヨレヨレと折れ曲がり、すぐに直立する。そういえば黒いクシ型のマツ毛が伸びでもしたように邪魔になっている。後ろの体節が歩くから、私も進んでいる状態のまま、少し広い通りに出る。わたしの力で歩いている時や、車の運転をしているとき、あれほど無謀に向かってくる人も車もおどおど、いじけきって、動きがよろめいている。

わたしに連なる体節が這い進み、その最後の体節、今度はわたしの一番後になってしまった彼女。多分彼女からこぼれる白いハクボクの矢印は、すでにわたしを導く仮定の点線ではなく、わたしが這い進んだ証拠として残る足あとになり、属している一匹の虫の足跡である以上、過去のものに違いないけれど、わたしの力で歩いたとは信じられない前進であってみれば、過去のなごりというよりも、別の何かにつらなる不吉な前兆を、うかつにとりこぼしていく気がかりな矢印だ。

それは幼虫としてやがて羽化し、異性を誘うきざしの点線かもしれない。彼がこれをたどり導かれてくる。

空中に彼の服がぶらさがったり、畳まれたり、投げ出されたり、そんな形で、こちらにくる。未来への時間的過程の一部の、そのまた一部を切り離して、肉体のない服だけの彼が先ず来る。

わたしは虫の一歩進むことをはばんだり、自分の力で一歩進むことを決心したりはしない。ただ気がかりで、一番後ろの体節の彼女との、幾つかの体節を媒介としたごくごくわずかな連なりの神経らしきものを、ずっと太い連なりにかえ、この虫全体を一つの脳神経節につくりかえなければならなくなっている。

自分のほか誰もいないかのように、所在なさそうにしていた男が、不意に、大変な早口で話し出す。

「そのときの料理は、フカのヒレも、目玉も、ウロコも、黒コゲでボロボロになっていた。彼女はそれくらいなことで泣く人間ではないんだ。魚しかなかったわけでなし、彼女一人でつくったのでもな

かったんだ。彼女が泣いて濡れた手を振ったとき、壁に貼ってあった画のなかに雨が降ってしまい、画面はなにか濃く一続きになった」

さらに早口になってくると、衒気症のように言葉の濁点をなくして発音したりする。

「彼女は、行こうとしているのかもしれないわ。といって、次に、とちらともとりかねるんてす、と言った。軽く言ったのだが、心にもないこととはちかうとも。たいがいあんな気候の日は、女は男の号令で静かに動くものだ。あの時刻、ラセン状に立ち上がっていた雲のへりがきらきらして、火焔色に光っていたが、焔の先の雲をかすめて、雨はパラパラと落ち、風は非常に強かった。彼女は逃げて、体ごと吹きとばされたとでたらめを言ったが、頬骨がとがって、肉が風圧で後退していた。しかし、二人は繋がっていて、彼女は引き摺られていた」

男は、前の恋人との記憶の、思い出す総てを女に話そうとしているらしい。醜いために嫉妬深い女の顔が、他人のどんな記憶をも吸収しかねない口を開けている。女は、男の話を聞きとっており、ゆっくりと口を開く。

「うすうすとわかってきて、わかってしまったような気がするわ。あなたは彼女の恋の記憶を、わたしに接木して植えつけ、わたしと彼女を一つにしてしまおうとしているのね」

女の声は途中で変質する。

「でもどうすればそれが出来るつもりなの。木の種類が違うのに、一つになれると思って？　彼女とわたしでは、お互いにまるっきり足りないところや、ぜんぜん余ってしまうところがあるのに……」

窓の外の深い緑のなか、青や黄の断片がまじりあい、黒が次第にその色彩を追い払い、緑も葉陰に後退していく。男のかわりに誰かが、折ろうと枝をたわめているのかもしれない。

「接木？　その言葉はおかしい。もっとずっと、言葉に手心をくわえながら話しているつもりだ」

「記憶なんてもの、大したものではないから……。ほら、年寄が、もぐもぐつぶやくあれとおんなじね。拒否するに値するほど価値のあるものでなし、聞いて気疲れのするものでもなし、ぼんやりして耳の突き当りで聞きましょう。さぞうまく接木できるに違いないわ」

並んで坐り、何かがわかってしまい、女は冷たい風が吹き込んでくるほど目を開けっ放しにし、男の方は、女を創造の核心を欠いた彼自身の製作物であるかのように、緊張しきって見守り、やがて思い通りにつくり直すために企てている。

二人のほか誰もいないから女は思いなおす。

「ほんとにそれができるつもりなの？　あなたの思いついた方法の全部で試みてもかまわない。一人分の記憶じゃ心細くなっていたのよ。そのうち、このベントウバコの片隅でトリコになっているような、わたしの記憶も誰かに接木してかまわないわ」

話していることに逆らいようもなく、女が早口になると、男は、こんどは言葉の出口を閉ざし、思いがけなく手のなかに不意の叛乱がおきて、液体がユタユタ重みを倍にもして、ひとりでに波涛になってしまう。口を大きく開ければ開けるほど、手の中が鎮まりそうだと条件反射的に知っていながら、口が引っ込んで形をかえてしまいそうなほど閉じて、グラスを下にもおかず、飲みもしない。むしろ手のなかの動きにうながされ、暗い体のなかで饒舌になって、ひとりごとをしゃべりまくり、自分の独り言同士で際限のない話をし、女、つまり男の未完成の製作物に、付加する副材料を聴衆のひとりにすることによって、これからの仕事をよりしやすくしようとしているらしい。

だから自然女は、男が自分の地点で自信を増すのを回避させたくなる。

「あなたはうっかり間違って、彼女のものでなく、あなたの記憶を少しずつかきまぜながらわたしに移植しようとしている。あなたは、彼女と記憶を共有していると錯覚しているけど、あなたにだけ密着して、自分ひとりにしか似ていないという自信にいるんじゃなかった？　記憶を共有していたら、あなたは彼女に似ていることになるのに……」

外では野生にかえってみすぼらしい花しかつけない植物の、こわれた支柱がゆれて、ケシ粒のような点になった実が上下運動をしている。

女は睡眠中にしつっこく聞かされることによって教育されてしまう方法で、目覚めているのに、こ

っそり息を殺し、時を忘れたかのように改造され続け、男は周りをぐるぐる歩きまわって活気づきはじめる。聞こえて来る特殊なひねまがりの連続音がとぎれ、拍子ぬけする一瞬、男の声が質問を発し、非常に遠いところで答えを答える。

女はまだ若々しく体力があるのに、自分でコントロールできる場所まで脱出しようとしないで、無理に自分をおさえ、簡単に何もかも招き入れてしまう素直さで、理性の活動を阻止するための教育を受けようとしている。言葉の向こうからガス体になった記憶が姿を現わし、吐き出され、吸い込まれ、吐き出され、呼吸された空気のように行方不明になる。

そこには、始まる前か、終わったあとのひえびえとした空間があるにすぎない。

わたしは今に限って、信じにくいほど遠くまで見透す力をもち、なんとわたしの視力によって何百もの人々を揺り動かしている。

電車が蛇行しているのかもしれない。十いくつかの車両は、わたしがその端を固定し、振っている

かのように、後にいくほど大きい振幅で、右へゆれ、真直ぐになり、左へゆれ、乗客を乗せていながら、一本のムチ状に振れている。わたしはどの車両の乗客も全部見透せる位置にいる。だれひとり、わたしに気をとめている人はいないけれど、接近も意思の伝達も不可能な誰かに振り回されていることを意識して、危険なく扱ってもらうために同時に二つ三つのことを考えることをやめ、身動きをとめ、体を固めていく。

わたしを導いてここまで連れて来てしまった彼女は、遥にかけはなれた一番後ろの車両にいて、わたしにゆだねきっていることに気づかずに、振動するものに閉じ込められ振り回されている。

じっと見つめつづけ、振幅を極限まで大きくし、彼女たちを跳ね飛ばしてしまうことを目標に、視線で振り回す。

電車は駅らしい駅とかけ離れた土地を走り、駅らしくない駅も素通りして、誰にも知られていない衰弱した地帯をいくようだ。どうしても、周りと混合できない流れのように、電車は、電車のもつ時間帯にのって、説明出来ない強さを持った軌道にいるらしい。彼女が一人で引き続けた矢印の点線は、ついに電車の軌道に身を寄せ、いま、わたしにゆだねて、その先端に凝縮している。わたしを支点にして、右に曲がり、左に曲がり、ゆれを示す車両の列を、視線で振り回す。

すっかり昔の原形を壊された彼が来る。普段の癖になっているどの動作もしようとしない。普通、

頬は膨らみをつくるためにあると信じられているのに、彼の頬は溝をつくっている。目のふくらみ、飛び出した口の部分との二つの山の間が、鼻の両脇のくぼみから連なった溝である。

わたしは低い座席にいるけれど、彼はもっと低いところに顔をおいて、わたしを支点としてふれている車両の列をいままで介添えをして振っていたかのように視線を重ねる。

「後ろの車両は揺れていないのに、こちらはこれほどくねって振り回されている」

彼の視線は重なっていても、わたしと正反対の動きを捉えているらしい。少し陽が翳っていて、なにもかもはっきり見えるから、彼は目を開けているのに一つのコツがいるというように、顔中を大きく動かして、その勢いによって目を開き直し、瞳いっぱいに無数の動く点を捉え、窓の向こうの空まで同じもので満たしていく。

わたしはやはり車両の列のずっと先迄見通している。彼のみる彼女を支点とする二つの振動が錯綜し、目の前で変にうごめいて停止すると、いつのまにか、いままでと反対に、彼のみるように、後部の車両ほど振幅は小さくなり、わたしのいるところが、最大の振幅を増していく。

「こんなに揺れていると、体をささえているのに骨がおれる。ほんとに本来の速度で進んでいるのかな？　時間まで同じきざみをささえているのに骨をおっているようじゃないか」

彼は斜め半身で前の車両の方に向き、床すれすれのところに自分の重心をおくみたいな具合に移動

しはじめる。ゆっくりしているが、歩くのにそれだけの時間が絶体に必要だといわんばかりに、一秒の何分の一かの間も、丁寧に見計らって。

斜め半身にしていく彼は、半身が水に浸されていて、波にもてあそばれているようだが、わたしと彼女の間にある線上の振動にいる。

彼はまだ、彼女とわたしの間の、わたしに近い場所を歩いている。

車両のうねりは、彼のいる一点において、もっとも振幅を大きくしており、彼女とわたしの二人が、丁度ナワトビのナワの両端をもってふっているような関係になっている。あるいは、同じウソ、同じまなざしで、わたしと彼女がよく気のあったふり方で、ふりまわしているのかもしれない。

わたしと彼女との間の距離の八対二、七対三というふうに、位置を向こうに遠ざける彼の、彼と彼女、彼とわたしの距離の不均衡によって、わたしを強く引っ張っていた力が、次第次第に彼女の方に移っていって、わたしの腕の筋肉が和らいで眠たい気分だ。

女は鉄棒にぶらさがる。女はつけ加えられる不快さを振り子になって、振り落としたくなっている。振り落とし、素晴らしく均衡のとれた一点を探しあてることができれば、それが倒立している姿勢であってもかまわない。少年は女よりもさきに大きく回転しはじめ、女の悲鳴を聞いていない。

「手がつぶれる！」手のなかで皮膚がしぼられ、襞をつくって、手と棒の間に挟まれているようだ。

「手のなかで、手がつぶれる！」

女の服のなかで、両方の腕が抜けてしまいそうに変形する。肩のなかに首が埋まってしまい、体がだらりとたれさがって、持上げる力がない。

棒の丸みのかたちに曲がった指を屈伸して、女はあらためて、もう一度鉄棒にぶらさがり、両足を棒にかけ、逆さになって手のなかで手のつぶれる痛みをやわらげる。

斜傾した支柱と直角に交わる鉄棒が同じ重みで組み合っている。少年も同じ形になって、さかさの顔と顔を見合わせる。二人の髪が顔のまわりから払いのけられ、女のスカートやレースのスリップが裏返えしになり、顔に柔らかく被さるのを、女は顎で押えている。日に焼けて光る腿が現れている。

落ちていき、最後に地上に激突する零点何秒まえ、一瞬まえであるという姿に、生物のもっとも安らかそうな、長い長い休息の姿がある。

「洞窟で冬眠するコウモリみたいだ」
「ジャングルのなかのなまけものみたい」
ふたりのさかさの顔面の筋肉がゆがんで、どこかもの哀しくユーモラスである。
顔を見合わせていると、首から肩までのねじれが、そのままかたまってしまいそうに不自然になり、前を向く。女は生れてはじめてのように、逆さという自然の方向に背を伸ばして、鉄棒のぬくみを感じる。
大地よりも、もっとおっとりとした空が足許にあり、異様に淋しく、こんなとき、女は逆さのまま男に抱きすくめられたら、きっと、男の鼻を思い切り足蹴にできそう。
少年は棒の上を飛び越し、何回転かまわり、体全体に今までと正反対のよじれを与えると、さっきよりも、ずっと頬が落ち窪み、少年とは思えない疲れた表情にかわっている。
疲労のためか、筋肉の一部が地球の引力にひかれてか、運動した後の大袈裟な身振りや、笑い声や、少年らしいしかめっ面はない。
「こんな風に、にらみあってすきを窺っている動物もいると思うわ」
「逆さにぶら下がっている動物なら、どうせおどおど自信のなさそうなオスとメスなんだろうなあ」
女は降って来る陽光や雨粒を上瞼のなかや、鼻孔にまであふれさせ、目を閉じると、息をつくこと

ができなくなる。ヒザ裏のところを鉄棒で切断されそうだ。気まぐれな声を出すまいとしながら、鉄棒がさらにヒザの関節の裏側に切りこんでくるので、声を出すほか防止する方法をもたない。女は陥ちこんでいるのではなく、ここに女を捕らえるワナがあって、ワナにかかったまま、獲物の解体作業がすすめられているようだ。

少年は女を解体する作業の手助けをして、鉄棒をゆさぶっていることに気づいていない。

「この鉄棒はずいぶんたわんでいる。あれれ、逆さになると、誰もが似てしまうのかな？　表情を支える力が弱いのか、なんとなく姉さんに似ている気がする」

女は自分に似たものが何人となくいるらしいのに、どうして自分を半分に切断しようとする力があるのか理解できない。命が若すぎて弾むとみせて、少年は空に足を浸そうにも届かないというように足を天にのばし、次に倒立し、大袈裟な回転で、女を足の上から頭の下から、素早く眺めつづけるが、二秒前、一秒前、〇、五秒前などの残像がぶつかりあって、見ないと同じくらいに、女の全部が殆ど見えない。少年の勢いが余り強いので鉄棒はキリのようにもまれて、女の足に食い込んで、もっと切断が急ピッチになる。女は痛い痛いといい、それ以外の姿勢をとり得ない。まるでノコギリで切られるために、誰かにその位置にしっかり固定されてしまっている。

と言っても、固定しようとする力にしたところで、なんの裏付けのある力でもないから、信じてと

がったヒザをもたせかけると、欺かれるように、苦もなく女は下に落ちてしまう。女は下に落ち、差し延べた自分の手を握る。

少年は女を頭の上に見たり、足下に見たり、眩惑させかねない回転を続け、やがて、女を目標に、少年自身よく知らない技法で、降りるために決められた線をなぞりでもする具合に、不思議な曲線を描いておりる。横から見れば胸をはって蹲まった鳥をおもわせる姿勢のまま、何も言わず、何も見ていない。女の目の底におかれてしまったのか、場所をふさいでそこにいる。

「どうしたの？」女は何回か聞くが、一つの答えもなく、質問が溶け、奇妙な不在感がある。少年一人ネガを反転させてしまったような、すべてを恐ろしい無反響にしてしまっている。

「一体どうしたっていうの？」女は少年に聞こえることを期待せず、信じられない気持ちをもらすまいとするささやき声だ。

女は目隠しされているように、手さぐりで遭遇するものの全部である少年の背や肩を叩いてみる。見えないと感じていて、勿論見えている。

少年は笑っている。どうしていいかわからない戸惑いを笑っているのだ。軽い笑い、影のない笑い、なぜ声をださずに笑うのだろう、何故いつまでも笑っているの。おかしいことなど、一つもないのに。そうね、そうね、泣きつづけてとまらない人を、慰める言葉をもたないのと同じに、少年の笑いをた

だ見守るほかない。
少年は自分の首から下の神経を切断して、体を振落とし、全く不純物の支配をうけない本当の笑いを笑っている。
「立てよ！」
「そこから動かないと蹴飛ばすぞ」
「笑いやがって！」
少年の、今の笑いと、ずっと古い時間の体と、頭と体の形がちぐはぐでそぐわないことに、集まってきたものたちは気づくが、彼らの日頃のやりかたと同じに、口でおどすだけで何ひとつ出来ないでいる。笑いが続き過ぎるから、女はいつしか少年が死んでいると思う。集まってきたものにも、知らず知らずのうちに、わかってくる。
少年は集まっている者たちを見、その顔越しにもっと遠くにいる者たちを見、ほぼ自分にそっくりの者たちだけに囲まれていることを確める。
突発事故が起こると、可能性の多様性を感じさせるが、事件が自分の死である場合、死であるという一つの動かし難い事実しかなさそうだ。しかし、少年は自分だけの歴史への逃げ場を持っていなければ死ももっていない。死の中で膨張しつづけ、もっと、もっと、遠くにいる者たちの頭越しに、も

っと多くの自分そっくりの者たちを見る。その者たち全部と少年は一体化することが可能になって、いる場所と関係なく接触が可能になっている。
「ないわ、ないわ」女は同じ言葉を繰り返し使いつづけることによって、誰にも聞かれないうちに、誰かに言いたいことのありったけを話してしまい、おじけついている者たちを残し、逃げることが出来ている。

彼女の手で、そっと階段の上段におかれたボールが転がって、次の段におち、トトンと二、三回小さくはずみ、次の段におち、一、二回トトンとはずみ、次からポン、ポンと一段に一回、二段に一回、はずみ、加速度を増して落ちていく。
いたるところに自分はいそうだが、わたしには隠れる家がない。一つの弾力性のある体にまとまり、弾みながら、今までよりずっと楽に、降り続ける。殺人をおかしてきた犯人のようなアリバイを持たないひとびとが、落ちこんでいく協同通路のところどころに現れて声をかけるが、わたしは、彼らが

ときどき出没するよりも、遥に巧妙で独特な方法で、自分が出没しているのだという満足感をもっている。

またも、もう一度生れてくる順番を待ちでもするか、彼女らがいる。自分は幾つかの否認できない共通点で彼女らと結びつけられているのだろうとわたしは感じている。だから、さらに幾百かの自分を寄せ集めたかと思われるくらいスピードを増していく。

彼女は確実に停止している。なんの気負いもなく止っていて、矢印はまだ描かれていない。彼女の足下のアスファルトから葉をもたげる雑草がある。

わたしの周りに、色んな形で出没した不完全なものは消え去って、追われるとか逃げるとかいう、不安定な条件さえ死をとげたか、そこには、あまりにも完璧な静けさがある。しかし、何かが通過している。通過しながら、正面衝突が避けられている。わたしは駆け始めにおいて、どこから踏み出し駆け始めたのか思い出さなければならない。走っているのは彼女なのかもしれない。再び何かが通過している。今まで気づかなかったけれど、彼はすでに呼吸の継続や、血液の循環運動の自律不可避の運動のようなものに繰り込まれて流れているのかもしれない。わたしは彼に出くわしていながら、なに一つ見ようとしなくなっている。この循環運動から彼は逃がれ出る意思がないらしい。わたしにしても、さっきまで、彼女の描く矢印に導かれて、歩き続けてきたのは、彼とおなじに、なにかの循環

みたいなものに組み込まれている証拠かもしれない。
彼は向かい合わせになっている闇のなかに迷い込んで、聞こえていないために避けきれない音に囲まれてしまう。音は袋になって彼をすっぽり覆ってくるから、体を袋の布目よりも小さい破片に解体しなければ、脱出する方法が見つからない。こちらがふくらめば、あちらが凹み、こちらが凹めば、あちらがふくらむという具合で、どうなるのか不安になりながら、持上げられ、おかれ、持上げられ、おかれ、運び去られる。
彼は少し前まで、自分は自分の体の一部だと思って来たが、とり出され、誰か知らない者によって運ばれ、誰かに袋ごと移植されるのではないかという思いにとらえられる。
やっと到達点におかれると、一滴になったように軽やかになり、確かに、袋の一部で誰かに連結される。
もといた場所に戻ってきたのではないから、彼の持物は何一つなく、どんな感情も透明になって開かれ、あらゆる責任から逃れている。つながれているから、ぶらぶらしてみても、あぶなげなく確かにそこにいるのだ。
「そうしているに限るわ、以前のあなたに比べれば気楽なものでしょう……。あなたの体中に布目がくっついていたころ、虫の巣みたいな内臓を持っていて、体の外から虫たちに狙われていたけど、い

まは、押さえつけると、つるりと滑ってしまうものになったようね。滑って拡がることもできそう。頭をいっぱいにして、合理的でありたいなどと言って皮膚を収縮させ、硬直していたころより、縮んでしまうなんてことは有り得ないでしょう。肉眼で見えないからと言って、かすかなものになったとは限らないわ。崩れて穴のあく細胞の病気はないのだから、逆光に覆われて暗いのだと思っているんでしょうけど、出来る限り白っぽい産毛を育てるにかぎるわ、少しは明るくなるから……」

今まで彼はいつも失敗し、はじめからやり直しているつもりだったのに、結局、彼自身から彼自身に向かって年月を重ねていくという、固定された喜びのない展開のない生活をしていたから、そんな束縛からあっさり解放され、彼の過去は、彼の持ったことのない記憶に連結し、彼の未来は彼のなかにない萌えによって発見される。彼は何ひとつさわる必要も見分ける必要もなく、なにかに対応した位置を保つ緊張からさえ逃れてしまう。

わたしの企てた陰謀は一つもないのに、彼女に対して、この機会に、あるいは、それより以前に企てられた陰謀があって、すでに予定通りに進んでいるらしい。それでも、わたしはその後を行くしかない。

「犯罪をおこす場合、顔を妙にゆがめるものですよ」

「本当でしょう？　本当よ、そらみなさい」

「何を言ってるんです？　ことは終わっているんですよ」
「総がかりでこの人を持上げて、体の重さを知ったらどうです」
「そらみなさい、たいそう身軽なもの」
　手遅れかもしれないのに、わたしには醜い顔が見えてくる。もう効力がなくなったと思っていた薬がもっとも都合のいい場所でききめを現わして、醜さが、彼女に似ている女たちを呼び集める、わたしはその影に隠れおおせる筈なのだが……。
「あの子は二つあるうちの一つの内臓を譲ると、言っておりましたのよ」
「それで？」
「人にあげるもののない場合に限って、どんな大切なものであっても、あげてしまいたくなって、そんなことを言ってしまうものなんですよ。だから貰うものなんか、なかったんです」
「あの子は死ぬとき、本当に死んでしまったのです。生まれる前は、わたくしの体のなかにもぐりこんでいたものですのに……。死ぬってことが、元どおりになることで、私の体のなかにもぐりこんでしまうことだったら、なんの面倒もないのよ」
「自惚れていらっしゃいますわ」
「頑張るのはおよしなさい」

「麻酔状態のうちに、あなたの体のなかから、一つの内臓が取り出されることになりますよ、そのあとと、その前とで、あなた自身には何の異状も認められないはずですわ。たとえ反対なさっても、あなたのしらないうちのできごとですから、なんの抵抗もできないことですよ」

彼はすでにわたしのいるところから抜け落ちて、わたしを自分のまま保持しつづけるための協力者ではなくなっている。わたしは何かフリをしている方がよさそうだと、何回も枕を裏返しする。

わたしは潜水していても溺れない人のように上手に眠りの深みにもぐりながら、眠りに溺れずに浮かび上がる泳法を考える。一定の深さ以上にもぐりこまないとか、一定の時間以上もぐりつづけないとか、中断する時間をどの程度とるべきか、何の資料も持ち合わせていないのに、苦労のすえ、これっぽっちの眠りにありつける。

わたしは顔色をかえ、目覚めていることにたじろいでどぎまぎする。わたしは確める。眠りの間に、引き出されて、抜き取られて、終わってしまったのかもしれない疑いをもって、指先で肋骨から落ち込んだ腹部まで、手のひらの幅を滑らせる。メスは背中に入れられたのか、腹部に入れられたのか、ヘソの窪みよりほか、指先でとらえられるささくれもない。腹部から後ろへまわる手のひらの向きがおかしくなり、腰の下に手のひらを敷いて傷口のないことにほっとする。

周囲は静かだが、何か一つの出来事のあった気配があり、隠し切れない破片が残っている。わたし

は体のなかに耳を傾け、充実とうつろの、二通りの音が、微妙な変調をしながら、コダマしているのをとらえる。体の中に空白がふくらみ、もうあとかたもなくなったキズの向こう側、抜き取られた内臓のあった場所に、とぼけたような気泡が次第に充ちていく生暖かい振動を手のひらで捕まえる。

下に落ちていたチョコレートの銀紙が吹き込んだ風で転がりだし、異様に光り、光がちぎれて、くすんでとまる。

……それで、わたしから、抜き取ったのね、背中から？　どこから？　知らぬまに……。

わたしは軽くなっている。つなぎとめておくヒモを失った、魚の浮き袋のようなものが、ふわふわするので、水平感覚が狂い始める。わたしは体のなか、空白の自己運動に完全に支配され、見当はずれの方向に手をのばす。ポッカリ開いた空白は、魚の浮き袋を放し飼いにしたように、尻が上になったり、腹が上になったり、片頬で浮かび上がったりしている。こんなありさまなのに、誰にも抗議できず、わたしの行動にソラの名が打ち消し難くまつわりついて離れない。

泥棒は思いがけなく、始末の悪い贈り物を置いていくものだ。

百グラムか、二百グラムかもわからない内臓の空白にしては大きすぎる。もっと、思いがけないものが抜き取られているのではないか、それが何であるか思いつかないのだから、脳の一部分だということもあり得る。動かされてどうにもならないわたしは、普段曲げたことのない方向に腕を曲げ、傷

跡を確めようと、髪に指を滑らせるが、サラサラ鳴る髪は、いかにも多くの傷あとを隠しつづけているように、皮膚をおおって、じかにふれることをはばんでいる。

わたしは脇の下から自分の肩を掴み、眠りにもなっていない、はっきりしないときをもつと、突然、自分の意識の監視力に不安を抱き、体中に、シーツの織り目の、あとほどの変化も逃すまいと耳をすます。

……やられたらしい。

……やられたとも限らないわ。

無意識のうちの出来ごとが記憶され、貯えられているものなら、もっとゆうゆうとしていられるに違いない。

求めもしないのに、こっちから自分に接近していくものは、お粗末なものにみえるのか、彼女はわたしを物をみる目で見ている。

見つめられているために、わたしは真横に歩く。物体にされて、マネキン人形のように担ぎ上げられて運ばれそうだから……。本人でなければちょっと分からない位のしかめっ面をし、バッグのなかのものを、かたかたいわせることで、笑ってみる……。

風が吹いて、わたしの後ろで、背びれのようなものが翻っているが、洋服のどの部分なのかわから

ない。

彼女はわたしの足が地までとどいていることを見届けるように、そしてその足が引っ張り上げられでもしたように、顔をさげてあげる。

この顔と顔。幼児の絵のようなもの。誰を描いたのか、誰に似ているのか、なんとでも言える稚拙すぎるもの、ふたりの顔と顔が見つめあった回数だけ侮辱された数になっている。彼女の人差し指と中指にはさんだハクボク。握りもしない、落しもしない。彼女でないずっと違う誰かをモデルにして、わたしを切り刻んでいるのかもしれない。

つねづね、現実の世界の秩序に鼻をこすりつけるのになれていなかった男は、意味のあるものが全部邪魔になっていたのに気づいたとき、周囲のなまぬるいものを、冷たいものと、熱いものに分解し、古臭いずっと前に失った匂いをみつけだし、過去と過去化していく現在を未来に根づかせようとしている。この循環のなかに組み込まれなければならない理由をぶちこわしながら、まわりを共通の展開

にいると信じて、未来にかすり傷をつける作業をつづけている。
サディステイックにはぎとられた無抵抗な男は、繰り返し、憎しみに追われて、役にたたない解剖後の体のような構造に迷い込む。慌てて、手遅れではないと、自分になにかを強いてみるけれども、経験をためこむことも、役立たせることも、なに一つできない。
男は踏みつけられた草の葉を元通りに起している。禾本科植物の葉で指がきれる。指は男から離れて、洗う水のなかにすべりこみ、赤い水を流しきり、切り口がひらひらして、部分的に死んで冷えきっても、生まれてからずっとそうでありつづけたように、いぜんとして彼の手に結びついている。
「色が変わって灰色になってしまったよ。草の葉先はサボテンの針と同じに耳を澄ませば、ピンピン鳴るほど硬いのだね」
「迫害をうける側から見ると、そんな風に思えるのね」
女の話声が、空気に小皺をよせている。
「傷つけた葉っぱをもう一度見つけられるかな？」
どの草も地面を土台にして、べったりと重心をかけ、動こうともしない。
「見つけなくとも、踏みつけることが出来そうね。地面を信じて離れようとしないはずだから」
世界はふんわりしているから、かえって女は圧縮されそうになる。

女はやわらかい幼い手をして、ひっかいて、土に穴を掘る。幼い手が、ふざけると、とめどなくなるのと同じに、土を跳ね飛ばすと、幼い手と同じ年頃の少女が見えてきて、体験する資格が与えられてしまう。ぽかんと開けている口の周りを、黒く隈取り、誰ともはっきりわからない者が、離れ離れに、目と目をおいて、片方の袖をたくしあげる。

引っ掻くと、光は穴のなかをよじ登ってくる。ここにいた空気の塊が、もう海岸地方に移っていってしまい、そのあとがガランドウになっている。

女はずっと前、幼い頃したことを、いまやっと経験として心のなかで形作っていく作業をしているのかもしれない。女の座り方は斜めになっている。土のなかも、堅くて石のようにくずれない異質の土があり、周りから掘り下げて取り去らなければならない。

「自分から死ぬ必要はない、鉄さえバクテリアに食われていくんだよ」

男は言いながら、女の掘っている墓穴のなかに、辻褄のあわない微笑をする。

「同情しているの、わらっているの？　それだったら、ここからずっと離れたところで、こっそりと同情するなり、笑うなりして欲しいわ」

女は平面よりいくらも低くない穴のなかで、いくつもの身振りをおきかえる。

「ひとから侵略される心配から逃れる唯一の方法が、こっそり消えることだと思ってるのかな？　違

うの？　女性が、汗まみれになって重労働をしているところを見るのは、見物人にとっては面白いけど、気が変ればよいと思っているんだ。どうせ、どっちつかずの、しぶしぶってとこなんだろうから？」
「そんな見当外れの説明していないわ。ただ、わたしと正反対に、あなたは、癒し難い楽天家で、まだ人間のなかにもぐりこんで、生き延びようとしているらしいと言っただけよ」
男はほのかな赤味を額に浮かべ、逡巡したあと、土につけていた膝をあげ、馴れきった姿勢になって立ちあがる。
立ち上がると、あらゆる人物に似通い、生れてくる資格の一つである未知の部分をこわしている。
「ぼくは、ぼくらしいなんのしるしも持っていないからね。きみだってそう変っちゃいないはずだろう！」
「あなたがそこにいることは、カニなら、コウラに似せて掘った穴がそこにあるってことになるのね」
「カニは誰なんだろう？」
「誰でもある、その誰かもはじめから似せた穴なんだわ。あなたが人間のなかにもぐりこむことは、同じ寸法の穴のなかに、同じ寸法の穴が落っこちることね。わたしが穴を掘って飛び込むと同じことなのに、どうして正反対のことだと思っているの？　ここにいることは、空気の中に、わたし以外のもののなかに、わたしがへこみを作っているってこと、それだけの空洞があるということ。大抵の人

も、それであって、頭、胸、足の形を外界に押し付けて形を作ったあとだわ。穴があって、あそこにもあって、わたしそっくり、どこにも見えない顔なんだわ」

女は思いがけなく、一つの時間のうちに、自分の全身を目のなかに入れ、行動のいかさま臭さの消えていることを確める。向かいあった空気のなかで、男は環状に拡がってくる土の匂いを、疲れに襲われたように呼吸する。

「しかし、ぼくは生活するために、自分の血と肉を混ぜあわせる奇妙な作業を続けているんだよ」

女の影はもう地上には落ちないで、穴のなかに吸い込まれている。

まだ取り返しのつかないことではない。男は幾度かこれに類似した出来事に出逢っているのではないかと思う。知らず知らずのうちに女に注意をつなぎとめていることができなくなり、この女と他の女と区別してきた尺度を失って、男は万華鏡のなかを覗いたように、多数の女のうち、どの一人が彼女であるという決定ができなくなり、全部のひとりひとりに彼は現れなければならない。

彼のある種の感情が、唖然としているうちに、自分を彼女たちの数ほどに分割し、この女たちの総てに姿を現わさなければならなくなる。

それなのに男は、空の上澄みまでのぼるなと命令された鳥のように、地上すれすれにいる。周囲には男を必要としている気配はなく、つつましい無感動がある。男は歩きながら、ひそひそと、自分の

分解作業を続けていることに変りはない。全速力で車を飛ばしたり、進めなくなったりしながら、体の裏側と表側、体の上と下、あらゆる部分部分を繋ぎとめている細い糸に痛みが走るのをとらえようとしている。

自然の花の構造よりも、造花の方が簡単でわかり易いように、男が自分を知るために作りあげた彼よりも、本当の彼はわかりにくい構造になっていて、扱いにくい存在である。

女はまだ汚れていないノリでこわばっている布を、穴の周りにぐるりと敷いて、その端を穴のなかに八方からたらす。布は乾いたときの太陽の熱で、いまだにほてっているが、惜しげもなく布の上に土をもりあげて、さらに穴を掘り進んでいく。

水色の布の上で、土は、五十センチの高さになり、一メートルになり、四十センチになり、七十センチになり、山脈になって、いくらか濡れたまま、思いがけなく桃色に変わり、そこに積み重ねられていることに耐えようとする苛立ちのように、絶えず小さくこぼれる。

すでに乾いた薄色の土の塊もあって、土の山脈の外へ固まったままこぼれ、さっきまで男のいた跡を消してしまう。

女は、その方向を見るが、上にあがって見ない限り、穴の外に積み重ねた土の全量を知ることはできない。いくどとなく、足のあり場所を変えても、同じ位置から少しも移動できはしないのに、踏みかたまらない穴の底に、ほかの土くれよりも、色と光が、薄暗がりに吸収されるのに手間どっている塊がある。女は湿気で艶をなくした爪で、掴み取ろうと、かがみこむ。女の濃い影は穴の底を黒一色に陥没させる。穴は正確な形を失いはじめ、穴であることさえ、見分けにくくなり、女がそこに存在していることさえ、次第に疑わしくなってくる。もう半睡におちこんで、巨大な闇に所有されてしまった生死、どちら側に落ちていくことも可能になる。

女は今までになく、地球の引力に強く結びつけられる。落ち始める前のきわどいバランス。布の端が穴のなかで引っ張られ、素早く落ちる何秒の何分の一かの土の落下線は、にぶい斜線になって、途切れることなく落ちる。

土は女の重さの何倍にもなって、のしかかるが、頭や肩から重みはさけられている。透かしていく光は勿論もうない。彼女は顔をぴったりと土につけて、鼻の頭を、圧迫で白くしているのかもしれないが、穴の中に、穴が落ち込んだという変りばえのしない出来事がそこにある。

穴のなかで穴がつぶれ、穴の外で穴がつぶれ、内と外で一緒につぶれる。どちらの穴も、正確な形を失い始め、それであると、見分けにくくなっていたから、掴みどころのない出来事があったというにすぎない。

地面からの距離、女の左右対称な中心線、みんな意味をなさないで、中心線から離れたところにも、女と同等の意味をなさない女が、同じ重要性をもっている。女と女を離している土も空気も、どこかで途切れ、伝わっていく音も熱も存在しない。

道路がカーブして、わたしはいきなり太陽をみつける。空気中の塵のためか、赤紫いろの平板で大きな円に見え、薄汚れた雲が流れてくると、半円にかげり模様ができて、月から見た半地球に変ってしまう。

白いハクボクの線は、地平を分割する菫色によって能動的な力を弱められ、路面に抱き抱えられる格好で、わたしたちの外側を歩いて、わたし自身の運動を導くにはたよりなくなっている。

ハクボクが割れてこぼれて、一部分がほころびながら、彼女はうわべだけでも安堵するまで、わたしの好奇心を自分のまわりにつけ加えたいと貪欲になったように、次第に描くものの間隔を縮め、せかせかとしてくる。重大なウソを閉じ込めるために吐き出すカイコの糸のようだ。手が迷って、ひそかに後ろを盗み見る。彼女の行先をきめる矢印はまだ描かれていない。

彼女の足下のアスファルトはかなり彼女から遠ざかって位置しており、腕には足のように靴のヒールがついていない。肘を曲げ、迷っている。

矢印は折れ曲がり逆戻りをはじめたのかもしれない。あまりにも前に進もうとする意識が強すぎると、後ろに進んだり横に進んだりするものだ。

わたしが嘲笑をはじめる寸前、彼女は立ち止まり、呼吸をとめ、動作をとめ、時間をとめ、わたしが笑いを飲み込み終わると、一緒に息を吹き返す。そのほんの少しの間が彼女に休息をあたえてくれたというのか、わたしが追いつけないほどの速度で進みはじめる。

ぽっかり真空状態のなかに突き放されて、わたしはいかにも自由であるが、なにか恐ろしくうさんくさいものを感じる。過去、現在、未来のわたしの時間ごと誰かに持上げられ、ばら撒かれそうだ。

歩きはじめてから、もう何時間になっているのか勘定できなくなっている。ずっと前に、ことが起っているのに、現場ではまだその模様が現れないでいる気配。すでに事故をおこしている車の群、の

ろのろしているわたしが、おそらくものすごいスピードで走っており、ヒューン、ヒューンと風をきっていく車がのろのろしている。或いは、円形のタイヤが、八角、六角、四角、三角、爆発、そのあとの残骸なのかもしれない。

音と音が互いに消しあって、地の底が無限に拡がって行く。長い間歩き回ったからといって、どこに行き着くというのか、偶然的不運のなかに、ごちゃまぜに投げ込まれたとしても、本当の終わりはなさそうだ。

わたしの背中の一部が動くので、後ろをふりむくが誰もいない。背中の痙攣なのだろうか、次々足を前に出すという繰り返し続ける行為のなかで、退屈さえ忘れているのは、どこかマヒしている証拠で、背のそのあたりに原因があるのかもしれない。

わたしは振り向いたついでに来る筈のない彼を、その目で探す。

男は長々と横になったり、丸くなったりしながら、ときおり、眼球一センチ前に顕微鏡的発見をすると、さらに細かい素粒子的発見の応接にいとまがなくなり、それが丁度、変質しにくい物質で輝いているかのように、何億倍もの可視のものに埋まってしまう。

いつか何かを決断し、実行しなければならないということから、男は行方不明になっており、もう、その位置を動かないで、総てことたりている。

日暮れになると、特別の音の伝わり方、別の光の進み方があるのだろうか、さまざまな細部を失い、膨大な時間を濾過してきたように、ここにそれがある。

慌しく錯綜したものはずっと前のことになったか……。白いハクボクで囲まれた輪郭だけの路面、わたしは群衆に包含されて、死体の脱け出ていってしまった厚みの全くない空白をみる。ハクボクで描いた、×〇、人型。

「どうやらおれはまだなんだ」

「誰かさ、もう一人のやつさ」

見つめていて止まらずに、誰も大股に通り過ぎていく。その先に、路面いっぱいに描かれた白いペンキの巨大な矢印が、台風の襲ってくる進路のように曲がり、舗装の壊れたウロコを浮かべている。

かたわらに、細いハクボクの矢印があり、その半分を、ペンキの矢印にのせて、亀裂にできた窪みをさしている。

もっとその先に、薄暗いために、さらにか弱くかすれてしまったハクボクの矢印の先が、地下を通って、再び亀裂のくぼみから抜け出してきたように、鳥の嘴ほど、ペンキの大きい矢印から突き出して、糸玉のような、彼女が前に描いたことのある、マークらしきものを指している。

わたしは夜が来るすさまじい力によって、限りなく小さくなりながら歩いていく。

完